

## 栗原 優『現代世界の戦争と平和』

( ) 内の数字は、本書の頁数。

山本 達夫

東亜大学 人間科学部 人間社会学科

e-mail: yamamoto@toua-u.ac.jp

本書は、「先進国の平和」という著者独自のキーワードによって、現代世界の戦争と平和の問題を論じたものである。「先進国の平和」とは、欧米の先進諸国が、第二次世界大戦の終結以来一他国を侵略したことはあっても、少なくとも自国は一平和な状態を維持したことをいう。ただし「先進国の平和」は、他方では、後進地域における戦争に次ぐ戦争と表裏一体の関係にあり、また、その平和は、人類の滅亡と隣り合わせの、薄氷の平和である。本書は、こうした状況が歴史的に出現する過程を分析し、現代史における戦争と平和のメカニズムを実証的に明らかにするとともに、戦後60年の日本の「平和」を「先進国の平和」の一環として理解し、長期的な世界史的視野の中でとらえ直したものである。

著者の栗原氏は、神戸大学で長年教鞭を執り、同大学名誉教授、現在は創価大学特任教授である。専門はドイツ現代史で、我国のドイツ現代史研究を国際的水準に高めたといわれる大著『ナチズム体制の成立』をはじめ、これまで『第二次世界大戦の勃発』、『ナチズムとユダヤ人絶滅政策』など、膨大な史料の分析にもとづく優れた研究を数多く発表している。こうした研究を通して栗原氏は、ドイツを中心とした現代史の諸問題の解明に多大な貢献をしてきた。本書は、氏の長年にわたる研究の蓄積を基礎とし、その延長線上にありながらも、新たな構想の下に、日本と世界が直面しているアクチュアルな問題に照準を合わせた実証研究である。

本書の構成は、概要、次のようになっている。

はじめに

I 現代世界の戦争と平和

II 三つの世界戦争の起源：「安全な戦争」とそ

の帰結

1 第一次世界大戦

2 第二次世界大戦

3 ベトナム戦争：管理された世界戦争

若干の展望

補論 戦後日本の平和について

栗原氏はまず「先進国の平和」の概略を踏まえ、第I章において、平和学・戦争学が提供する種々の戦争統計によりながら、現代世界の戦争と平和、すなわち「先進国の平和」の問題を分析する。そしてこれを受けて、第II章において、1871年（ドイツ帝国の成立）に「先進国の平和」が初めて出現し、これ以降に戦われた先進国間の様々な戦争を、「先進国の平和」の文脈の中で再解釈する。そして最後に戦後日本の平和に論及し、平和憲法の見聞性を、長期的・構造的な視角から擁護する。

本書の実証部分である第II章で具体的に論じられているのは、第一次世界大戦と第二次世界大戦、それとベトナム戦争の3つの戦争である。いずれもそれ自体、十分大きな研究テーマであるが、栗原氏はそれぞれの分野における最新の研究成果に至るまで目を通し、それらを「先進国の平和」との関連で論じるのである。「先進国の平和」について、氏が指摘しているのは、次のような点である。①1871年に登場した「先進国の平和」は、二度の世界戦争に中断されつつも、これを貫いて第二次世界大戦後の世界に連続している。②先進諸国は後進地域に対する戦争（植民地獲得競争）を行いながらも、それが先進諸国同士の戦争へと発展しないように、紛争の調停に努めるようになった（「先進国の平和」の基本的メカニズム）③1871年以降、先進国間では戦争が起こる原因が消滅しつつある。

こうした観点に立って、氏は上の3つの戦争について叙述しているが、適切な史料引用とも相まって、氏のスケッチは説得的で、含蓄に富んだものである。氏によれば、第一次世界大戦と第二次世界大戦は意図的に起こされたものではなく、ともにヨーロッパの後進地域に対する限定的な局地戦争（「安全な戦争」）として始められたものが、結果的に拡大してしまったものであり（84、147頁）、またベトナム戦争は、核拡散防止条約締結に見られる米ソ接近、及び両国による核の独占と世界の分割支配に対する中国の反発（中ソ論争）を背景に、その端緒が形成されたという（171-172頁）。また、冷戦後の世界に「世界の警察」として君臨するアメリカ合衆国国民意識についての、「アメリカ国民は戦禍ははきらいだが戦果は好きなのだ」（187頁）という指摘も、正鵠を得たものである。さらに、戦争勃発に対する「アメリカ国民の帝国意識、アメリカ国民の意思」の責任（220頁）についての氏の叙述を見るならば、歴史的に形成され、日々のニュースや情報の選択的提供によって維持・増長されているアメリカ国民の帝国意識が、無批判に「民主主義」的な「民意」と称され、その「世論」が各地で新たな戦争を生んでいる事実気づかされるであろう。

最後の「補論 戦後日本の平和について」で、栗原氏は、「はじめに」で提起した「戦後60年以上に及ぶ日本の平和は何だったのだろうか」という疑問に立ち返る。そして、それまでの分析と叙述を踏まえ、「先進国」の一員として「先進国の平和」を構成する日本を考えるのである。ここで栗原氏が提示しているのは、1945年の終戦以来、60年以上に渡って戦争をしていないという、普段ほとんど意識することのない事実から出発し、これを「戦後日本の平和の基礎となっている現代世界の戦争と平和の歴史」という枠組の中で、長期的な歴史的視点でとらえるという切り口である。日本が他の少数の先進諸国と享受しているのは、「先進国相互の武力対峙と後進地域に対する戦争とに構造的に結びついたものとしての先進国の平和」（238頁）である。だが、この事実を前にするとき、私たちは、私たちがその中で生きている「平和」の意味を、改めて考え直さなければなるまい。

これといった資源もなく、食糧の自給さえままならない国土に暮らす我われ日本人が、日々莫大なエネルギーを消費し、飽食の毎日を送っているという事実も、著者の指摘する「日本の平和」の実態と重なって見える。南北問題の形成と南北間格差の固定化・強化にともなって、富や資源のみならず平和も、一部の先進国のみが享受できる体制が出来上がっている。1871年以来の先進諸国における「平和」は、じつは先進諸国による植民地支配体制の一定の段階、すなわち「近代世界システム」による地球分断の固定化でもあったのである。

こうした状況を念頭におくと、自分たちの繁栄を維持するためには互いに連携して、多数の人々の命や暮らしを公然と犠牲にしてはばからない状態を、いつの間にかあたりまえと感じている「先進国」の住民の傲慢と無知に気づかされる。「平和」はたしかに貴重であるが、この「平和」は、現実には、多くの戦争と死者・犠牲者の絶えざる創出によってのみ、はじめて維持されているのである。

イギリスの著名な歴史家E・Hカーは、歴史解釈における価値判断を論じた文章の中で、18世紀のあるイギリス人文学者の言説を紹介している。いわく、「万人平等という状態になったら、幸福な人間は一人もいないであろうから、それに比べれば、ある人々が不幸である方がよい」と（『歴史とは何か』岩波新書、115頁）。だが、栗原氏が描写する「先進国の平和」の中身やその構造は、「甲の不幸は乙の幸福で諦めがつく」とか、（先進国の福祉水準や教育水準の向上といった）「進歩の代償」といったものとは到底言えないものであることを明らかにしている。その意味において、「後進地域の戦争に対する先進諸国の重大な責任について考える世界史的な視野」（63頁）という栗原氏の指摘は、きわめて貴重なものといえよう。

我われ歴史研究者は、自分の専門と称する小さな歴史的な事象を扱っているうちに、ともすれば、著者が本書で取り組んでいる「世界現代史の叙述」、あるいは「現代世界の戦争の基本的傾向」（275頁）といった、本来歴史研究が目標とすべき肝心な問題を忘れがちになる。これに対して著者は常々、一部の歴史研究者に見られる「一次史料

の過信」や「史料解釈の拒否や研究史や論争の無視」という趨勢に批判的であり、「研究を全体として理解した上で研究史を整理することが、歴史家の解釈の仕事を客体化して、自らの立場を確立するために不可欠な作業である」ことを力説している（『歴史学研究』694号、1997年2月、49項）。実際、本書を通読して私が痛感したのは、まさに、「史料と史料、史実と史実の間の因果関係をさぐる史料解釈」に、著者が注いだ意気込みである。そしてこれが、著者流の優れた「歴史家の主体的な解釈」となって実を結んでいるのである。だがこれが、単に目の付け所がいいなどという次元の話ではないことは明かである。ここにはまさに、著者の、歴史家としての「日本の政治状況に対する危機意識」がいかにか研ぎ澄まされているか、また「日本の平和と平和憲法の維持を志す日本国民」のために少しでも役立ちたいという切実な願い（276頁）が、いかに真摯なものであるかが如実に映し出されているからである。

以上のように、本書は新たな概念と枠組によって、世界現代史を再解釈しようとする意気込みにあふれたものであるが、二三気になる点もある。たとえば「先進国」、「後進国」が十分に定義されていないのも、そのひとつである。また著者は、ナショナリズムの発展を「国民国家の形成」と「国民国家の成熟」というふたつの段階に区別している（240-241頁）。しかし「形成」の過程というのはイメージできるのが、「成熟」というのは、なにをもって「成熟」したというのか、「成熟」の後には何か来るのか、いまひとつはっきりしない。栗原氏にあっては、「ナショナリズムの発展こそが『先進国の平和』をもたらすとともに、先進国と後進地域の戦争にも大きな変化をもたらした…最大の要因の一つ」（239頁）である以上、「成熟」の概念定義は重要な意味を持つと思われるだけに、さらに踏み込んだ定義がほしかった。いったい、「成熟」の判断指標はどこに求められるべきなのであろうか。

本書では、国境の確定（領土問題の解決）や主権をめぐる対立の解消など、一国内の国民統合の一定の段階が国民国家の「成熟」とされている。しかし著者が、先進国相互の武力対峙と後進地域に対する戦争との構造的結びつきを重要視してい

ることからすれば、一国内でのナショナリズムの形成と成熟という側面だけではなく、やはり（いわゆる「文明と野蛮」の意識の醸成などにみられるように）、国民国家を形成する国民の、地球上の被支配地域（植民地・半植民地）に対する特定の意識の形成と固定化も、「成熟」度を押し量るのに必要となるのではないかと思われる。つまり、国民国家を形成するだけではなく、その国家と国民が、「自分たちは、あちら側の人間ではないのだ」という意識をもつようになることも、決定的に重要になるのではないだろうか。その場合、同じ「ヨーロッパ」内の後発先進国であるドイツはともかく、アジアに位置する日本が、「こちら側」に組み入れられる過程における戦争と平和の問題も、いっそう興味深いものとなるだろう。

本書は、全体を通してわかりやすい言葉で書かれているが、ヨーロッパ近現代史、また第二次世界大戦から冷戦終結の時代にかけての世界の歴史について一定の予備知識がないと、多少理解しづらい面もある。しかし、著者が「はじめに」と「若干の展望」で展開した議論を踏まえて、「補論戦後日本の平和について」をじっくり読み込むならば、かつて学校で習った世界史とは違う世界のイメージが浮かび上がることだろう。そしてその上でもう一度、自分の頭で考え、さらに進んで自発的に歴史へ問いかけ、自分なりの答えの模索と探求に乗り出してほしい。

ミネルヴァ書房（2007年6月）A5 / 288頁、2,940円